

オンライン大学における日本語リテラシー教育の取り組み その2 受講生の主観評価調査

隈 裕子[†] 佐野 琴音[‡]

サイバー大学[†] 日本学生支援機構[‡]

1. はじめに

日本語を母語とする大学生の日本語能力の低下が問題視されはじめたのは 1990 年代後半であり、以降、大学における日本語リテラシー教育の需要は高まっている。著者らは、スクーリングを必要としないオンライン大学において日本語リテラシー教育に取り組んでおり、その実践ならびに得られた知見をまとめ報告する。前報¹⁾に続き、本報では、受講生を対象としたアンケート調査による主観評価の結果を報告する。

サイバー大学は 2007 年 4 月に開学したオンライン大学である。学士号取得の要件となる科目の全てがオンラインにて運営されており、インターネット環境にあれば時間、場所を問わず受講が可能である。2014 年 10 月時点で 1,465 名の学生が在籍しており、うち約 7 割が社会人学生である。ここでは、インターネットを使用した e ラーニングによる教育を行う大学をオンライン大学と呼ぶこととする。

2. サイバー大学における日本語リテラシー教育

科目“日本語リテラシー”は、学部共通の教養科目として、2011 年 10 月より年 2 回（春・秋学期）開講されている。オンライン大学における学びの基礎として、学術的日本語の基礎だけでなくインターネット上でのコミュニケーションスキルの向上を含めた、読む・書く技術の習得を目的とする科目である。インプット・アウトプット型を重視し、e ラーニングの同時性を有しない学習環境へのアクティブラーニングの導入に取り組んでいる。

表 1 日本語リテラシーの授業構成

第1回	文章の種類と日本語表現のルール
第2回	文の成分 文法の基礎 語法
第3回	文の組立て 注意すべき用法・語法
第4回	文章の基本 構成 推敲
第5回	文章と図表を読む 文章の要約
第6回	作文と論文 執筆の手順 問題提起 主張と論証
第7回	結論と考察 わかりやすい文章 発表と議論 注意事項
第8回	総括

Japanese Literacy Educational at Full-Online University Part2

[†] Yuko KUMA, Faculty of Information Technology and Business, Cyber University

[‡] Kotone SANO, Japan Student Services Organization

表 1 に、授業構成の概要を示す。授業は各回、講義（または講義＋演習）および課題により構成されている。講義は VOD（Video on Demand）による講義コンテンツの視聴、演習は WBT（Web Based Training）による演習や演習問題の解答であり、演習を含む回では講義コンテンツの視聴後そのまま演習にて復習を行う。演習の結果は評価には反映されない。課題は小テスト、レポート、協調学習、ディベートなどである。協調学習は、過去回のレポートを使用し、それを数名のグループ内で講評し合う。これには原則、教員、TA は介在しない。本科目におけるディベートとは、受講生、教員、TA へ開かれた、ある特定のテーマに従い意見交換を行う場のことを広く意味する。また、受講生が教員に対して質問をする場として“Q & A”，自由に意見交換のできる場として“フォーラム”などがある。

3. アンケート調査による受講生の主観評価

3.1 調査概要

表 2 質問項目

Q1	“リテラシー”という言葉を知っていましたか。
Q2	講義（VOD）の形式を選択できるとしたらどちらを選びますか。 教員の映像あり／教員の映像なし（音声のみ）
Q3	Q2.について（自由記述）。
Q4	授業の構成を選択できるとしたらどちらを選びますか。 講義のみ／講義＋演習
Q5	Q4.について（自由記述）。
Q6	“良い”と思うものを選んでください（複数選択可）。 演習／テスト／レポート／協調学習／ディベート／期末試験レポート／ ディベート（任意）／アクティビティ（任意）
Q7	“改善が必要である”と思うものを選んでください（複数選択可）。 演習／テスト／レポート／協調学習／ディベート／期末試験レポート／ ディベート（任意）／アクティビティ（任意）
Q8	協調学習に参加してみたいかでしたか。
Q9	Q8.について（自由記述）。
Q10	“アクティビティ（任意）”に参加してみたいかでしたか。
Q11	Q10.について（自由記述）。
Q12	“レポート”に添削は必要であると感じますか。
Q13	Q12.を次に活かすことはできそうですか。
Q14	Q12、Q13について（自由記述）。
Q15	本科目に期待する要素を選択してください（複数選択可）。
Q16	Q15.について（自由記述）。
Q17	受講した感想や意見（自由記述）。
Q18	所属・学号・氏名（任意）。

表 3 アンケートの回答者数と回収率

	2011F	2012S	2012F	2013S	2013F	計
回答者数[人]	11	19	11	6	10	57
回収率[%]	30.6	26.8	36.7	13.0	33.3	—

※表中のSは春、Fは秋を示す。例：2011F→2011年度秋学期。

本科目では、授業運営の参考とすることを目的とし、受講生を対象としたアンケート調査を行っている。時期は期末試験終了後、約一月の間 LMS (Learning Management System) 上にアンケートを開く。回答は任意である。表 2 に質問項目、表 3 に学期毎の回答者数と回収率を示す。

3.2 調査結果

過去 5 学期 (2011 年秋～2013 年秋学期) の調査より、興味深い結果を得た 4 項目、表 2 中の Q4～5, Q8～9 について述べる。

図 1 に Q4 の結果を示す。授業の構成として、“講義のみ”と“講義+演習”のいずれかを選択するとすればどちらかという質問に対し、“講義のみ”は 7.0%，“講義+演習”は 68.4%，“どちらでもよい”は 24.6%であった。Q5 の自由記述に回答をした受講生は全体の 38.6%であったが、この内訳は、29.8%が演習に対するポジティブな意見、1.8%が演習に対するネガティブな意見、1.8%がどちらでもよいという意見、5.3%がその他の意見であった。一部を次に示す。

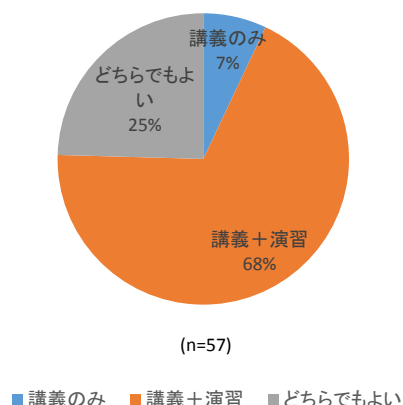


図 1 Q4 : 授業の構成を選択するなら

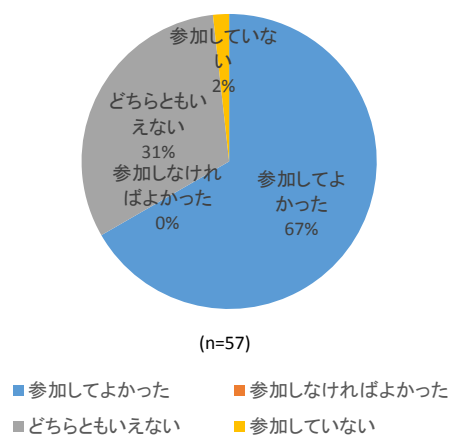


図 2 協調学習に参加して

[ポジティブな意見]

- ・ 理解度の確認ができる
- ・ 講義の復習になる／講義の再視聴に繋がる
- ・ 知識の定着に繋がる
- ・ 面白い

[ネガティブな意見]

- ・ 負荷が高い

図 2 に Q8 の結果を示す。ここで、協調学習の運営について説明を添えておく。協調学習では、過去回で作成されたレポートを使用する。対象となるレポートが課題として提示される際には、それが協調学習の材料として使用されることも伝えられるため、受講生は、他の受講生からの講評を受ける前提でレポート作成を行うこととなる。協調学習の回では、受講生は 5～6 名のグループに分けられ、グループ毎に設けられたフォーラムなどの“場”を通じて活動を行う。フォーラムにはレポートが掲示されており、受講生は、自身のグループ内で互いのレポートを読み講評をし合う。図 2 より、協調学習について、参加してみてどうだったかという質問に対して、“参加して良かった”は 66.7%，“参加しなければよかった”は 0%，“どちらともいえない”は 31.6%，“参加していない”は 1.8%であった。Q9 の自由記述に回答をした受講生は全体の 57.9%であったが、この内訳は、22.8%がポジティブな意見、15.8%がネガティブな意見、19.3%がその他の意見であった。一部を次に示す。

[ポジティブな意見]

- ・ 他の人のレポートを見ることができる
- ・ 自分のレポートに対する意見が貰える
- ・ 他人からどう見えるのかが分かる
- ・ 人に見せることを意識して書く経験を得る
- ・ 1 回では足りない／もっとしたい／楽しい

[ネガティブな意見]

- ・ 悪い点の指摘がしにくい／抵抗がある
- ・ 恥ずかしい／名前を出されたくない

[その他の意見]

- ・ 教員のコメントが欲しい

4. まとめ

受講生を対象とした調査により、講義と演習を組み合わせた授業構成ならびに協調学習に対する主観的満足の高さが明らかとなった。

参考文献

- 1) 隈裕子, 佐野琴音: オンライン大学における日本語リテラシー教育の取り組み, 情報処理学会第 74 回全国大会講演論文集, pp.485-487, 2012